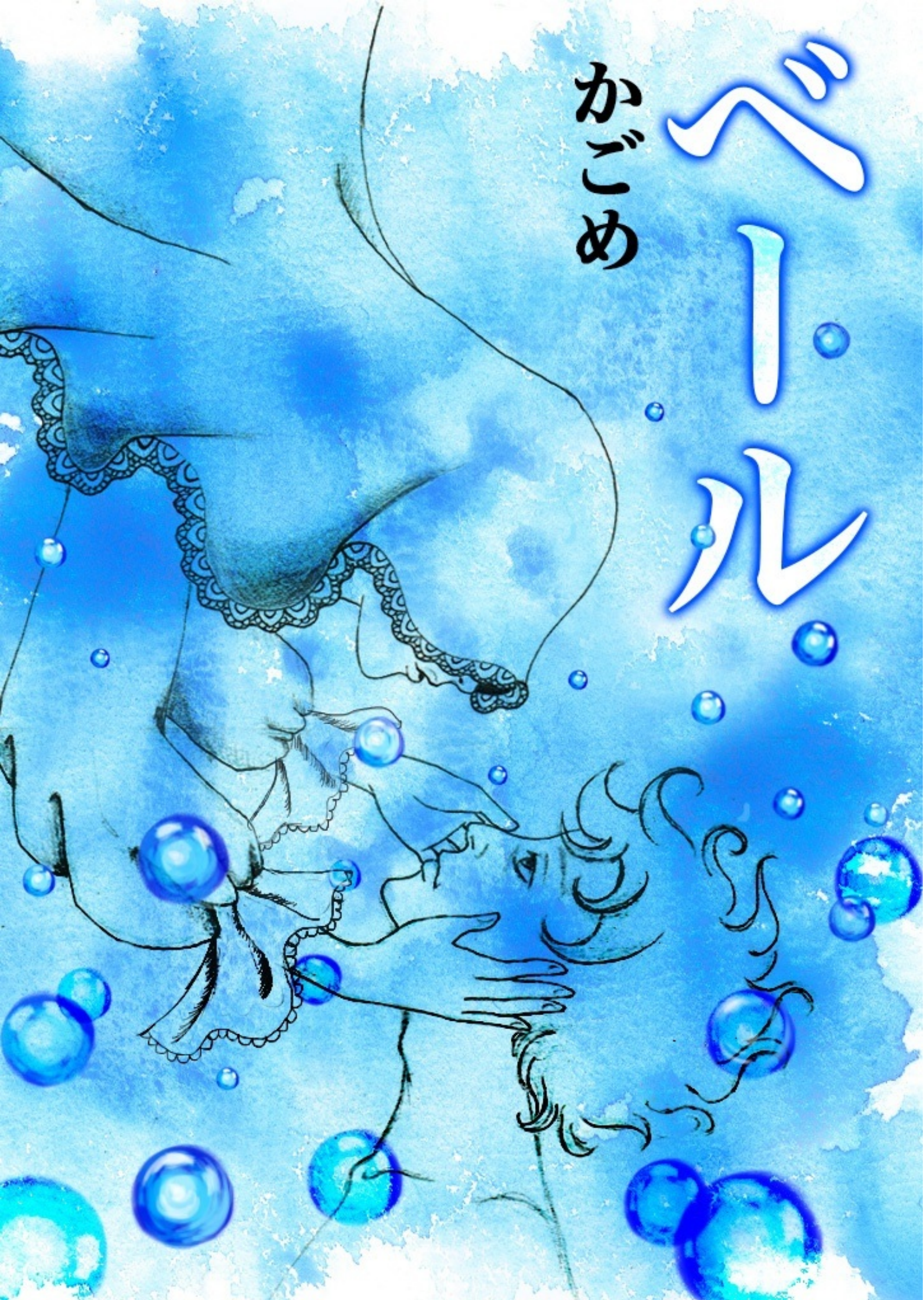


かごめ

# ブル





深夜、バスタブに身を沈めて息を止める。  
水中でじっとして頭が痺れてくる頃、  
バスタブの水面がさざ波のように震え出す。  
それと同時に、湯気に紛れて女は現れる。  
遠くにある月みたいに、最初はぼやぼやとしていた輪郭はだんだん濃くなって、  
やがて女の形になる。  
女は頭からすっぽりとレースのベールを纏っているため、その顔は見えない。  
どんな表情でバスタブの中の僕を見ているのだろう。  
もしかすると、女の方も僕が見えていないのかもしれない。  
お互いの顔は水面すれすれの距離にある。  
僕は水の中でしっかり目を見開いて、女を見る。  
ベールが柔らかくゆらめいて、ちらりと覗いた唇は、またすぐに隠れた。  
少し微笑んでいるようにも見えたが、  
そうであって欲しいと願う僕の気のせいかもしれない。  
僕はもどかしくなって、ベールを掴もうと手を伸ばす。  
僕の手から逃れるように、女は湯気と一緒に換気扇の中へ吸い込まれてゆく。  
それを追うように、僕は手を天井に向けて精一杯を伸ばした。  
その勢いでザバァッとバスタブから上半身を起こした。  
1分ちょっと息を止めていただけだが、  
肩を上下させて貪るように空気を吸った。  
今夜もいつもと同じ。  
もう何度この繰り返しをしているだろう。

はじめて女が湯気とともに風呂場に現れた時も、  
僕はバスタブに身を沈めていた。  
その頃は激務な仕事の割に貧乏で、そのうえ失恋をした。  
忙しさを理由に会う時間を作らず、金もなく将来も見えない。  
そんな男は見限られても当然なのかもしれないが、理由はそうじゃなかった。  
「あなたからは何の影響も受けないんだよね。良い影響も悪い影響も。ラクっちゃラクだけどね」  
一ヶ月ぶりに会った恋人との会話で、何気なく言われた言葉。  
いてもいなくても同じ。つまらない人間と言われている気がして、  
心を抉られる思いだった。  
じゃあ僕にとって彼女はどんな存在なのか。  
我慢強く、相手を尊重し、わがままを言わない物分かりの良い女性。

抱き合っただけを重ねれば分かりあえる。

そんな風に都合よく思っただけはなかったか。

それならば、ひどいのはお互い様だ。

結局、別れを切り出したのは僕だった。

その頃の僕には、彼女の言ったことの真意を汲み取ってやれるほどの優しさも余裕もなかった。

心も体も疲労の限界だったのだ。

湯気とともに現れた女を見た時、

このままあの世へ連れて行かれるのだと思った。

いつまでもすり減り続けて行く、体も心も金も何もかも。

膨らみ続ける不安な日々を終わりにできるなら、それでいいと思った。

けれど、いつまでたっても女は僕を連れて行かなかった。

ただゆらゆらと漂い、バスタブに沈む僕を見ていた。

僕はだんだん息が続かなくなって、思わずプハアッと顔を出すと、女は消えた。

それがこの夜の始まりだった。

一度、換気扇を取り外して中を調べた事がある。

まさかとは思ったが、やはり女はいなかった。

そこにはただ、ホコリとカビにまみれたダクトがあるだけだった。

卑しいほど繰り返したこの夜は、突然終わった。

お互いが見つめ合うことはついになかった。

いくら水中で待っても、女はもう僕の前に現れなかった。

限界まで息を止め、勢いバスタブのお湯を飲んでしまったり、

「あっそ、もういいや」といじけてみたりした。

そんな自分が可笑しくて笑ったら、

声は思いがけず大きな音となって、バスルームに反響した。

本当に久しぶりに自分の笑い声を聞いた。

一週間後、僕は待つのをやめた。

待つのをやめた僕は、相変わらずの激務と一人ぼっちの日々を送っている。

だけど、それほど自分に悲観しているわけでもない。

重症だと思っていた傷は、いつの間にか些細な傷になっていたし、

どんどん膨らんでいった不安によく目を凝らせば、

霧のようなつかみどころのないものだった。

いくら払いのけてもあるなら、晴れるのを待つしかないのだろう。

ベールを纏ったあの女が、ただの僕の妄想であったとしても構わない。

死神だろうと幽霊だろうと、僕にとっては特別な存在だった。

間違いなく、あの夜があったから朝を迎えることができたのだ。

いつか、人生の途中かはたまた終わりで、また会うことができたなら、  
その時こそベールを取って見つめ合いたい。